

国語

問題冊子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

- 1 この冊子の本文は10ページまである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあった場合は申し出ること。

- 2 解答は、問題ごとに、答案用紙（別紙）の所定の欄に記入すること。

- 3 答案用紙は、その一、その二、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験番号	氏名
1	
2	
3	
4	
5	
	大塚 茶織

- 4 答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。
- 5 この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

物理学者の寺田寅彦は、一九二〇年に発表したエッセイ「電車と風呂」のなかで、満員電車に乗る人々の気分を記述している。ラッシュアワーにおいて、乗客は大抵の場合に不機嫌であり、その顔は神経質な過敏さを帶びている。誰もがその空間を不愉快に思つており、そしてそうした不愉快さは強い伝染性をもつてゐる。いわばその車内は不愉快さの空気に飲み込まれてゐるのであり、人々はその空気のなかで個性を失い、画一的になつてしまふ。

寺田は、こうした満員電車における伝染性の不快感のうちに、ある種の特殊な日本的性質をドゥサツしてゐる。日本の満員電車では、単に車内が満員になるだけではなく、そこに暴力が発生する。互いのことを押し合い、つぶし合い、足を踏み合いながら、相手に対して剥き出しの嫌悪感を示す。そうしたことは海外の満員電車にはなかつた。つまり、電車や鉄道という同一のテクノロジーを用いながら、それによつて引き起こされるヘイガイは異なるのである。

(1) ここで注目すべきことは、寺田がこのことを、「当り前ならば多分何でもないと思われるべき事」と見なしていることだ。彼は、海外に赴いて再び日本に戻つてきたからこそ、この伝染性の不快感のうちに示されるある種の異常さに気づくことができた。しかし、そうした経験をしていない人間にとって、満員電車における暴力は決して異常ではなく、そもそもそこに伝染性の不快感が蔓延まんえんしていること自体に気づくことができない。そのとき暴力は、そこに存在するにもかかわらず、認識不可能になるのであり、認識不可能である以上、それに加担することを免れることもできなくなるのだ。

満員電車に強い関心をもつた寺田は、一九二三年、「電車の混雑について」と題されたエッセイを発表してゐる。そこで彼は懷中時計をもつてラッシュアワーの東京市電の停留所近くに赴き、電車に乗り込む人々の様子を観察した。

寺田の分析は次のようなものだ。普通、人間は満員電車には乗りたくない。そして、電車を少し先に送り、後から来る電車に乗ることができれば、満員電車に乘らずに済むことができる。そうであるとしたら、停留所に到着した後、数本の電車を見送ることが合理的な選択である。しかし、実験の結果はこれを裏切るものだつた。彼の目の前で満員電車に乗り込もうとする

人々は、電停に到着した後、それがどんなに満員だったとしても、直後に来る電車に乗ろうとした。したがつて、第一の帰結として、人間は自ら望んで満員電車に乗ろうとしている、ということになる。そして第二に、そのようにすることによつて、満員電車に乗ることを望む人間は、満員電車の混雑を強化することに貢献している。

満員電車をめぐる寺田の分析の要点は次のように整理できる。第一に、満員電車において乗客は他者に暴力を加えている。第二に、乗客はその暴力に自ら望んで加担している。第三に、そうすることによって、⁽²⁾乗客はその暴力を再生産している。第四に、乗客はそれを仕方のないことであり、何でもないと思っている。そして第五に、乗客自身にとつても満員電車に乗らないほうがむしろ効率的なのであり、乗客が満員電車に乗るのは、乗客の「趣味」である。

満員電車をめぐるこうした寺田の分析は今日においても説得力をもつてゐる。しかし彼がそれを発表したのは一〇〇年前である。そしてそれが意味しているのは、日本社会における満員電車をめぐる状況が一〇〇年前から根本的に進歩していない、ということに他ならない。

ただし、この第五の点には疑問の余地がある。たしかに、乗客自身にとつても、電車を数本遅らせたほうが満員電車を回避することができ、不快感を軽減することができよう。しかし、だからといって乗客が満員電車に乗りたくて乗つてゐるわけではないだろう。少なくとも乗客は、もしも乗らないで済むならば、満員電車に乗りたいとは思っていないだろう。それでも満員電車に自ら乗らざるをえないのは、電車内で不快感を抱くことや、あるいは他者に暴力を振ることよりも、優先すべき何かがあるからである。では、それは何なのだろうか。

社会学者の磯村英一によれば、それは、満員電車を不可欠とする都市のシステムである。磯村によれば、都市とは「できるだけ多数の人間が、同じ時間に、一定の場所に集まることによつて、高度の集積の効果、都市エネルギーを生む」ものであり、満員電車はその副産物に他ならない。この意味において、満員電車は、システムの機能障害によつて引き起こされているというよりも、むしろ、都市のシステムによつて要求される一つの機能なのである。磯村は次のように言う。

逆説的にいえば、都市に住む者の大多数は強制的に、定められた時刻、定められた職場に、定められた学校に集合することが要求される。もしそれができないとか、阻害されるような場合には、人間は都市生活のなかで不適格だというらく・印^おを捺されることになる。

(3) これは極めて逆説的な事態である。なぜなら、前述の通り、満員電車に乗ることはむしろ人間を非人間的にするからだ。非人間的であることを受け入れられる人間こそが、社会適格者として承認され、その環境に耐えられない人間は、つまり非人間的であることを拒絶する人間は、かえつて社会不適格者として扱われる。

だからこそ、寺田が述べていたように、満員電車の不快感を回避するために電車を見送るということが、人間にはできない。それをしてしまったら、社会不適格者になってしまふからである。そしてそれは、電車が人身事故などによつてストップしたときの、乗客たちの異常なフンヌ^(c)を呼び起こすことにもなる。磯村は次のように述べる。

定刻に集まることのできないものは、‘‘遅刻者’’として取り扱われる。それは遅刻者自身にとつてマイナスであるばかりでなく、定時の集合を原則とするメカニズムそのものにとつても損である。だから都市が、交通の混雑にともなつて、その打開策として‘‘時差出勤’’などを奨励するが、これなどはまさに都市そのものの自殺的行為といわねばならない。例えは、どんなに巨大な組織があつたとしても、その組織だけで、都市の機能が果たせるものではない。時差出勤のために、ある銀行は十時に始業したとする。他の銀行は九時に始業したとするならば、その一時間が銀行の業務にとつて、どれだけの損害をうけるだろうか。

ここから、なぜ人間は自ら望んで満員電車に乘ろうとするのかが明らかになる。すなわち、もしも満員電車に乗り損ね、通勤時刻を逸してしまつたら、それによつて都市の「メカニズム」そのものに損失を与えることになるからである。満員電車の

乗客は、自分のためだけに満員電車に乗るのではない。そうではなく、その満員電車によって成り立っている社会のシステムのためにそうするのである。

ここに都市の通勤システムがもつ二重の暴力性が示されている。第一にそれは満員電車の車内において人間同士の間の物理的な暴力を誘発する。⁽⁴⁾第二にそれは、^(d) そうした暴力に耐えられないものを、社会不適格者として排除する暴力を發揮する。第一の暴力がそれとして認識できないことは述べたが、第二の暴力もまた不可視である。当然のことながら、この世界には満員電車の暴力に耐えられない人々がいる。身体が弱い人、道具を使わなければ立てない人、かつて満員電車のなかで傷つけられた人、こうした人々は大きなハンディキャップを負う。そして、実際には高い知識や能力があつたとしても、移動の機会を奪われ、自己実現の選択肢を狭められているのである。

これまで、満員電車の暴力性がどのように発露するのかを分析してきた。この暴力性は、本論がスマートな悪と呼ぶものによつて、よりよく理解されるようになる。

⁽⁵⁾スマートな悪とは、無駄を排除するロジステイクスへと人間が自らを最適化し、その結果としてロジステイクスがもたらす悪に対しして人間が無抵抗になる、という形で発露する悪である。^(d)満員電車は、効率的に配置された都市のシステムによつて要求される機能であり、そのなかでは暴力が蔓延する。乗客は他の乗客をヨウシャなく押し潰す。それに対して良心が痛むことはない。それは、良心そのものがシステムへと最適化しており、それを悪いこととして認識できなくなつていてからだ。他人を圧迫することがあつたとしても、そうすることは仕方のないことであり、当たり前のことである、と乗客は考える。そして、そのように他者を圧迫することになると知りながら満員電車に乗ること自体も、仕方のないことであり、当たり前のことである、と考える。そのようにシステムに最適化しているがゆえに、車内で押し潰されることに対する文句を言わない乗客も、そのシステムの機能を麻痺させるような事態、たとえば人身事故に対してはフンヌを爆発させる。たとえその事故によつて誰かが亡くなつっていても、「迷惑だ」などと心無いことを思つたり、言えたりしてしまう。このような特徴は、そのどれもが、スマートな悪と符合するものである。

このような意味において、人間は、満員電車に乘るときにシステムの歯車になる。人間は自らをシステムへと最適化させ、スマート化させるのである。もちろん、このような主張に対しても次のような反論が生じるだろう。すなわち、そもそも満員電車はスマートなソリューションによって解決されるべき社会課題である、ということだ。たとえばイギリスではビッグデータとAIを活用して、乗客の移動状況をリアルタイムで把握し、人員や車両の分配を最適化することで、満員電車の発生を抑制するシステムが開発されている。それによって満員電車が解消され、不快な思いを強いられる人が減るのなら、もちろんそれは望ましいことである。

しかし本論が述べようとしているのはそうしたことではなく、むしろスマートな悪が今日においても息づいており、現在進行形で、私たちをオビヤ^(e)かしていることに他ならない。日本社会における満員電車だけがスマートな悪が発露している事例ではない。それは他にも、まったく違った場面で、恐ろしい暴力として作動しているかも知れない。そしてその暴力性は、スマートな悪という概念の性質上、私たちにとつて自明のものと化し、そもそも認識することが困難になっているかも知れないのだ。

こうした暴力性に対しても自覚であり、絶え間のない自己批判を怠るのなら、超スマート社会^(f)という理想像はむしろ悪を最大化する世界として立ち現れるかも知れないのである。

(戸谷洋志『スマートな悪』による。一部改変した。)

注 ○ロジスティクス—logistics 原材料の調達、生産、販売、回収など供給プロセス全体にわたる戦略的管理システム。
本来は軍隊用語であったのが、ビジネス用語に転用された。

問(一)

傍線（1）「ここで注目すべきことは、寺田がこのことを、『当り前ならば多分何でもないと思われるべき事』と見なしていることだ」とあるが、なぜ筆者は寺田の見解に「注目するべき」と述べているのか説明せよ。

問(二)

傍線（2）「乗客はその暴力を再生産している」とあるが、これはどのようなことを述べているのか説明せよ。

問(三)

傍線（3）「これは極めて逆説的な事態である」とあるが、どのような点が「逆説的」だと述べているのか説明せよ。

問(四)

傍線（4）「そうした暴力に耐えられないものを、社会不適格者として排除する暴力」はどのような形で発揮されると筆者は考えているか説明せよ。

問(五)

傍線（5）「スマートな悪とは、無駄を排除するロジステイクスへと人間が自らを最適化し、その結果としてロジステイクスがもたらす悪に対して人間が無抵抗になる、という形で発露する悪である」とあるが、これはどのようなことを述べているのか説明せよ。

問(六)

波線「超スマート社会という理想像はむしろ悪を最大化する世界として立ち現れるかも知れないのである」とあるが、あなた自身はこの問題についてどのように考えるか、そう考える根拠を明らかにして三〇〇字程度で記せ。

問(七)

傍線（a）～（e）の片仮名を漢字に直せ。

次の文章は賀茂祭の行列見物にまつわる説話である。これを読んで、問(一)～(五)に答えよ。

今は昔、賀茂祭の日、一条東洞院に曉より札立ちたりけり。その札に書きたるやう、「ここは翁の物見むずる所なり。人立つべからず」と。その札を見て、「これは陽成院の物御覧ぜむとて立てられたる札なり」と皆人思ひて、徒歩の人さらに寄らざりけり。いはむや、車といふ物はその札の辺(あたり)に立てざりけるに、やうやく事ならむとする程に見れば、浅葱(あさぎ)の上下着たる翁出で来て、高扇を使ひてその札の下に立ちて、静かに物を見て、物渡り果てにければ帰りぬ。

されば人、(1)「陽成院の物御覧すべかりけるに、怪しくおはしまさざりつるは、いかなる事にて御覧ぜぬにか。札を立てながらおはしまさざりつる、怪しき事かな」と、口々に心得ず言ひ合ひたりけるに、また人の言ふやう、「この物見つる翁の氣色は、怪しかりつるものかな。この奴(やつこ)の、院より立てられたる札と人には思はせて、われ所得て物見むとてしたるにやあらむ」など、さまざまに人言ひ扱ひけるに、陽成院、おのづからこの事を聞こし召してければ、「その翁たしかに召して問へ」と仰せられければ、その翁を尋ねられるに、西八条の刀櫛(とねね)なりけり。されば、院より下部(しもべ)を遣して召しければ、翁参りにけり。

院司、「汝、いかに思ひて、院より立てられたる札と書きて、一条大路に札を立てて人をおどして、したり顔に物は見けるぞ」と問はれければ、翁申していはく、「札を立てたる事は翁が仕りたる事なり。ただし、(2)」翁すでに年八十にま

かりなりにたれば、物見む心も候はず。孫に候ふ男の、今年内藏司(くらづかさ)の小史にてまかり渡り候ひつるなり。それが極めて見まほしく思ひ給へ候ひしかば、まかり出でて見むと思ひ給へしに、年は老(b)いにたり、人の多く候はむ中にて見候はば、踏み倒されて死に候ひなむ。(3)人寄り来ざらむ所にて、やすらかに見給へむと思ひ給へて立てて候ひし札なり」と述べければ、陽成院、これを見こし召し、「この翁、いみじく思ひ寄りて札を立てたりけり。孫を見むと思ひけむ、もはら理なり。この奴はいみじく

かしこき奴にこそありけれ」と感ぜさせ給ひて、「疾く帰りぬ」と仰せ給ひければ、翁、したり顔なる氣色にて家に帰りて、妻の嫗(おうな)に「我が構へたりし事、まさに悪しからむやは。院もかく感ぜさせ給ふ」と言ひて、我かしこげになむ思ひたりける。

されども、(4)世の人はかく感ぜさせ給ふを承け申ざりけり。ただし、翁の孫を見むと思ひけむは理なりとぞ、人言ひけると

なむ語り伝へたるとや。

(『今昔物語集』により、一部改変して用いた)

注 ○物見むずる所—行列を見物する場所。賀茂祭の行列は多くの人が沿道に見物のため集まり、大変混雑した。

○陽成院—陽成上皇。 ○車といふ物—牛車。車を「立つ」とは、牛を外して駐車すること。

○事ならむとする程—行列がやつて来ようとする頃。 ○浅葱の上下—浅葱色の上下の服。質素な身なり。

○言ひ扱ひけるに—取りざたしたが。 ○刀禰—平安京の小さな街区ごとに置かれた事務職。 ○下部—下級の役人。

○内蔵司の小史にてまかり渡り候ひつるなり—内蔵司の小史として行列に参加致しましたのです。

問(一) 傍線(1)を現代語訳せよ。

問(二) 空欄(2)には「翁」の反論する言葉が入る。それはどのような内容であると考えられるか、翁の計略を踏まえて、

簡潔に書け。

問(三) 傍線(3)を現代語訳せよ。

問(四) 傍線(4)で、「翁」の行為に対して、陽成院が感心した点と、「世の人」が承認しなかつた点は、それぞれどういう

ものか。簡潔に記せ。

二重傍線(a)・(c)について、文法的に説明せよ。

(例)受身の助動詞「らる」の連体形

次の文章を読んで、問(一)～(四)に答えよ。

(『蘇平仲文集』により、一部改変して用いた)

注 ○東郭氏—東郭は姓。

○腐鼠—腐ったネズミ。

○空同子—この文章の筆者、蘇伯衡の号。

○心術—心の持ちよう。

○平居—ふだん。

○歎惜治愛—心を開き、なごみうちとける。

○勢位—權威のある地位。

問(一) 傍線（1）「或」、（2）「所以」、（3）「已」の読みを記せ。現代仮名遣いでよい。

問(二) 傍線（ア）「利之善移心術也如此」を現代語訳せよ。

問(三) 傍線（イ）「而況有大於鼠者乎」とはどういうことか、前後の文意を踏まえて説明せよ。

問(四) 傍線（ウ）「与東郭氏之猫何異哉」とはどういうことか、右の文章全体を踏まえて説明せよ。